

創造的批評の史的変遷とその教授法

上 原 作 和*

はじめに

はるつのあかつき	春暁 孟浩然
ああ ずいぶん よくねちゃつた	春眠不覺曉
をや うぐひすが ないている あっちでも こっちでも。	處處聞啼鳥
そ〜そ〜 ゆんべあめが とに うちつけたが、	夜來風雨聲
きつと はなわかなりちったろ〜	花落知多少

一見、学生の落書きにしか見えないこの詩は、中学、高校の教科書でもお馴染み、中国唐代の詩人・孟浩然の「春暁」の訳詩、二次創作である。作者は成蹊学園の創立者・中村春二（1877-1924）^{*1}。東京帝国大学国文科出身の春二には国語国文学の業績ももちろんある。

○『かながきのすすめ』大正十一年（1922）

○『口訳方丈記』成蹊学園出版部 大正十二年（1923）

前者は、当時の文語漢文調が基本の国語表記に「かながき」を主張する自身の主張を一冊にしたものであり、後者は冒頭に掲げた「はるのあかつき」からもを類推できるように原作の主題は尊重しつつも大胆な口語表現を交えた自在な翻訳とも言うべき試みであった。

注目すべきは、「そ〜そ〜 ゆんべあめが」「きつと はなわかなりちったろ〜」である。古来の精確（正確）な文章なら前者は「さうさう夕べ雨が／そうそう夕べ雨が」「きつと花は散つてゐるであらう／きつと花は散っているであろう」と書くべきなのであろうが、こうした「正格」の表記を無視して口語をさらに砕けた表記としたところに、春二の革新性が見られると言うことであろう。これは、後述する春二の父で歌人で教育者の中村秋香（1841-1910）の韻文革新運動とも言うべき「新体詩」を継承しつつも、さらに感性や情動に訴えるものであり、極めて注目すべきことである。その基盤が、「分析批評」ではなく、いわば「創造的批評」であることに注意を促しておきたい。

さて、前稿でも書いたことだが^{*2}、本来「思う」「考える」と書くべきところ、一括して「感じる」と書く傾向が、学生を中心に、雑誌やネット上でも頻繁に見られるようになって久しい。「久しい」と言っても若者ことばの流行は、二、三年で大きく推移する傾向にあるから、ここ数年と置き換えて良いのかも知れない。

今年の本学学生の文章からいくつか書き抜いてみよう。

- 不思議に感じた
- 疑問に感じた
- 楽しく感じた

* 人文学部常勤教授 明星教育センター

「不思議に」は「思う」、「疑問に」も「思う」を下節させるのが慣用的な用法であろうし、「楽しい」はこれだけで意味が通るので、下接語は不要である。

総じて、これらは「印象批評」に繋がる典型的な語彙列であり、分析的、思索的な語彙と言うべき「思う」「考える」にはなかなかお目にかかれぬのが現状である。むしろ、一語「やばい」ですべて済ませているのではないか、と思われるほど語彙の乏しい学生もいないわけではない。これは25歳前後を分岐点として、世代間によって語義が全く逆転する典型的な語彙使用例である。言うまでもなく、学生たちの「やばい」は「めっちゃくちゃおもしろい」「とてもおいしい」「楽しくて仕方がない」、いわゆる大人世代の「やばい」は「とても危ない」状況、「大変困ったことになった」場合に用いられる。

もちろん、語の配列と組み合わせは時代の好尚性を反映するので、わたくしの「価値観」「判断基準」のみで正誤を論ずることは避けなければならない。一般には、『広辞苑』³にその用例があれば、これを正解、正確な語用例と認めるようである。もちろん、『広辞苑』にもごく一部の用例には疑問符が附くものの、このことに異論のある者は、屈指のことばの専門家であると言えよう。ちなみに、わたくしも、90年代、小学館の『日本国語大辞典第二版』13巻(2000-2002年)「語誌」、さらに古語辞典の「日本レキシコ」なる出版プロダクションから、三省堂、角川書店それぞれの『全訳古語辞典』について、月に50～200語項目を継続執筆していた時期があるが、いずれも中型国語辞典に百科事典を兼ねる『広辞苑』の「型」に学んで、それぞれ独自の特化を試みたものであったと言えよう。

したがって、大学での文章表現の基本も、岩波『広辞苑』文化とも言い得る、「型」が形成され、その「枠」の中で汎用化されていると言ってよい。

ただし、春二の国語革新の試みは、ステレオタイプ化した『広辞苑』の対極にあり、これの一見誤用例とすべき用法をも許容範囲とするものである。

むしろ、「創造的批評」の瞬発力を重視し、まず個性から、その情操、情念、思念を基調に、「創造性」に重きを置いていたことが分かるからである。

創造的批評の始発『古今集』 仮名序

やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人ことわざしげきものなれば、心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひいだせるなり。

花に鳴くうぐひす、水に住むかはづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛きものものふの心をもなぐさむるは歌なり。

伊達本『古今和歌集』

仮名序(905)は我が国初の歌論とされる。執筆者は紀貫之(?-945)である。内容は、引用した冒頭で和歌の本質とは何かを解き明かし、ついで和歌の成り立ちについて述べている。また和歌を六分類し、各分類について説きながら、和歌のあるべき姿を論じ、その理想像として前代の代表的な万葉歌人である柿本人麻呂と山部赤人を挙げ、六歌仙の人と歌風について論じて、最後に『古今集』の撰集過程、和歌の未来を述べたものである。

我が国の文藝批評史をたどることは紙幅の関係で論じ得ないので、この「仮名序」の文藝史的意義についてのみ、まとめておこう。そもそも、正岡子規『歌よみに与ふる書』(明治31年(1898))によって「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」と酷評されて、以後は顧みられなかった側面はあるものの、筆者の先師・萩谷朴(1917-2009)は、「仮名序」を「和歌発想論」と「花実相兼論」とに規定し、「対象を冷静な主観の中心にとらへて、

主知的な表現に工夫を凝らすといつた古今調」を完成の域に高めたと評していた（『新訂土佐日記』）^{*4}。また、大岡信（1931-）は『紀貫之』において、「フィクションの才」を認め、道真の漢詩とともに和歌史においては紀貫之が、その核心に位置していることを論じたのであった^{*5}。

まずは「主観」が先行し、それを「主知」、すなわち、主観的に知覚しつつ、分析することによって言語化することこそが、言語藝術であると言うのである。先の、中村春二の言語観に通うところがあるように思われる。

ちなみに、中村春二は「感性のきらめく」文藝とされる『枕草子』に、とりわけ深い愛着があったことが、元成蹊大学名誉教授の国文学者・松村誠一によって明らかとなった^{*6}。父・秋香の遺言によって、高弟・武藤元信（1854-1918

秋香の『秋香集 長歌 編纂者』に、自身の『源氏物語』の江戸初期写本蔵書を贈っているのである。当該写本は、のちに売却されて、『源氏物語』の最重要古写本旧蔵者である大島雅太郎（1868-1948）の「青谿書屋」にあったことが蔵書印から知られる。これは実質、東京帝国大学国文科助教授・池田亀鑑（1896-1956）の依頼による購入と思しく、現在は、池田亀鑑の旧蔵書を一括管理する、東海大学付属図書館桃園文庫に収められている^{*7}。「奥書」に春二の自筆で、

「父の遺言により武藤様の机下に贈呈いたし候 四十参年二月十八日 中村春二」

『清少納言枕そうし』写本 二卷一冊 桃 十八 二五^{*8}

とある。本書は、『枕草子』の数ある写本の中でも、成立当時の面影を宿す類纂本系統（堺本系統）の珍本である。秋香はこの本を以下のように評している。

余堺本（即宸翰本）の名をきくこと久し ざるは其上巻は群書類従の枕草子やかてそれなとも下巻は寫本にてよ
にいとすくなきなりものなれば さいつ頃に中村博士か家に藏せる岩崎善隆か校合本の宸翰書入本を寫してはつ
かに其一班をうか、ひしに けふしも浅倉書舗にてはからずも此書を見たる時のこ、ち何にかはたとへむすなは
ち價を問はず求め帰りて書屋の珍寶とはなしぬ 明治廿六年三月 中村秋香 （同本「奥書」）

まこと興味深い事実である。本写本の価値、あるいは『枕草子』の成立については、本稿の本旨ではないので、興味のある向きは拙稿を参照いただくこととする^{*9}。

後に触れる秋香の「新体詩」に『枕草子』をテキストに創作した詩があるので、冒頭の「春はあけぼの」を引いておく。

春は、あけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は、夜。月のころはさらなり。闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は、夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど、飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬は、つとめて。雪の降りたるは、言ふべきにもあらず。霜のいと白きも、また、さらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

新潮日本古典集成本『枕草子』による。

『枕草子』の主題を萩谷朴は、「次から次へと繰り出される連想の糸筋によって、各個の章段内部においても、類想・随想・回想の区別なく、豊富な素材が、天馬空をゆくが如き自在な表現によって、縦横に綾なされている」と評している^{*10}。

あるいは、藤本宗利は、文学史の見通しとして、「季節-時刻」の表現（春は曙など）は、当時古今集に見られる「春

「花朝」のような通念的連環に従いつつ、和歌的伝統に慣れ親しんだ読者の美意識の硬直性への挑戦として中間項である風物を省いた斬新なものである」とする^{*11}。いずれも、『古今集』『仮名序』を継承して、日本的な繊細な美意識を生成した先人の感性を巧みに言い表していると言えよう。

中村秋香と国語教育論

そこで、中村春二の文藝と思想の形成、国語観の形成に大きく参与したと思われる、父・中村秋香（1841-1910）の文藝を取り上げる。

秋香の文藝と閲歴は以下の如くである。

静岡市生まれ。幼少から父に歌学を学び、松木琴園門下。御歌所寄人となり、東京女高師・第一高等中学などに教鞭をとる。新体詩成長期に、風調・語格を主んじ、今の詞を生かし新事物を歌うことを提唱し、「新体歌」という新名称を主張した。『新体詩歌集』に、五七などの定型にとらわれぬ作を残す。当時愛唱された唱歌の作も多く、『新体詩歌自在』はひろく入門書として読まれた。『日本現代詩辞典』^{*12}

秋香の著作は、末尾にリスト化を掲示するが、まことに膨大である。しかし、近年まで、その著作は忘れ去られようとしていたと言っても過言ではなかった。しかしながら、再評価の気運が高まっていることもまた確かなことなのであろう。昨年上梓されたばかりの鈴木亮編『『秋香集 長歌』 翻刻と解題』は重要である^{*13}（『秋香集 長歌』明治四十年（1905））。

同書の序で揖斐高氏（成蹊大学文学部教授）は秋香の人と文藝について、以下のように述べている。

成蹊学園創立者、中村春二の父で、明治時代に歌人・国文学者として活躍した中村秋香。秋香は『落窪物語大成』を著した国文学者、宮内省歌所寄人をつとめた歌人としてわずかに知られるが、文学的には明治の新体詩人（新体歌人）としての活躍が目される人物でもある。日本に於ける近代詩は明治15年に出版された『新体詩抄』に刺戟されて和歌（長歌と短歌）の改良運動が始まったとされる。そうした改良体の長歌を「新体歌」と名づけて推進しようとしたのが中村秋香にほかならなかった。本書には明治の時代精神とでもいうべきものが濃厚に匂い立っている。一言でいえば、国家主義（ナショナリズム）と道徳主義（モラリズム）の鼓吹である。こうした要素を近代詩の出発点の中に正当に位置付けるのは、実は必ずしも容易なことではない。しかし、それらが近代詩の出発点における重要なテーマであったことを無視しては、日本近代詩の姿を正しく把握することはできないであろう。

揖斐氏の言う「明治の時代精神とでもいうべきものが濃厚に匂い立っている。一言でいえば、国家主義（ナショナリズム）と道徳主義（モラリズム）の鼓吹」は、当時の知識人に共通するキーワードも言えるが、このことは明星大学の創立者・児玉九十の思想と軌を一にするものであることは一目瞭然である。

○忠孝

其一

入りては親に孝を尽し、出で、君に忠を尽す、
これぞ日本、男子の職、

其二

能く孝なれば、家をおこし、能く忠なれば、國を強む、

孝と忠とは、国家の基本、」

其三

尽せ日本、男児の職、忠孝ともに、全くして、

御國を世界の、覇國とせよ、」

○夜学

其一

軒ばの柳に、月かたぶきて、書よむともしび、影またたけり、」

其二

しづまりはてにし、ちまたのかなた、はるかにきこゆる、遠吠のこゑ、」

其三

今宵もいつしか、一時をすぎぬ、この一まきだに、まだよみはてぬ、」

○学年末

学びの窓に、とびかふほたる、みつよつふたつ、かきかぞふれば、

ことしもいつか、みなづきのそら、」

ときちかよらぬ、しけむのつきに、ほどゝほからず、きうかのころに、

うれしかりけむ、たのしききうか、」

うれしやひごろ、はげみしるし、あらはれぬべし、たのしやつねに、

つとめてつかれも、なぐさめつべし、」

「○忠孝」は昭和の軍国主義の思想的な基盤となった儒教的倫理観が全面に謳われたものであり、すでに日清戦争、日露戦争の戦時状況を窺うに足るテキストである。「○夜学」は苦学生の「刻苦勉強」を具現化したもの、「○学年末」は「蛍雪の功」の『晋書』『車胤』伝、「みつよつふたつみつ」は『枕草子』『春はあげほの』の一節をそれぞれ踏まえて、漢文学、我が国古典の伝統に立脚しつつも、韻文の従来の「型」の「枠」を越えようとしているところに特色を持っていると言えるであろう。

秋香の『秋香集』以外の他の著作もいくつか取り上げておこう。

○暮色

聞ゆる、鐘の音。

煙こめつゝ、ほのゝゝ暮れゆく、黄昏。

雲路分けて、歸る村鳥。

五つ、四つ、二つ、遠近に。

空ゆく、浮雲。

つひのよすがは、眺むる袂の、夕露。

星の光、今ぞきらめくや。

一つ、三つ、七つ、こゝかしこ。

○親友

同じ机に書読みかはし 一つ硯に墨すりあひて
學の窓の明暮さらず 陸びし友あはれ其友
嬉しき事も又憂きふしも 共に語らひかたみに告げて
力となりもなられもしつゝ うたゝこゝらの年月も經ぬ
あはれ其友 志ばしと言ひて立ち別れしは 去年の此月
三月すごさで歸り來なんと 頼めしものをあはれ其友

「○暮色」は、先ほども指摘したように『枕草子』「春はあけぼの」の段の、「秋は夕暮れ。」から始まる一節と著しい親近性を持つ。「○親友」もまた、「○夜学」「○学年末」に繋がる「刻苦勉励」と「朋友」とを理想とする日本的な儒教的教育観に立脚した、明治近代日本の中の「反近代」なるものを体現していると言えるであろう。

おわりに

わたくしたちは、21世紀を十三年数えた現在も、中村秋香、中村春二父子にまだまだ学ぶことができると言えよう。

現代の学生の言語感覚を『広辞苑』「型」の「枠」の中に押し込めることの危険性、それは、中村春二の国語革新の試みに学べば、一目瞭然であろう。再説すれば、ステレオタイプ化した『広辞苑』の対極にある春二の文藝観は、現代の若者ことばが一見誤用例とすべき用法をも許容範囲とするものであったからである。

むしろ、春二のように、「創造的批評」の瞬発力を重視し、まず個性から、その情操、情念、思念を基調に、「創造性」に重きを置くことは、『古今和歌集』「仮名序」以来、日本人の精神文化に深く根ざしていることが判明する。

また、秋香は、明治の国語啓蒙に尽力した人である。後掲する文献一覧に依られたいが、その例として、「活語図」(1874)、「帝国紳士用文」(明26.4)、「祝日大祭日歌詞解釈」明26.10、「中古文鑑」[1],[2](明27,2)8、「皇国文法積義」(1898)、「皇国文法」(明31.7)などがあげられよう。これらは「文例集」とも言うべきものも多く、言わば「型」と「枠」を示したものである。一見矛盾するようであるが、「型」を壊すにはまず「型」、「基本」を踏まえて「応用」があると考えていたのではなかろうか。

時代背景には、当時の明治歌壇においては、鈴木重嶺(1814-1898)¹⁴らを主流とする旧幕臣や華族の旧派に対し、秋香はいわば改革派に位置していたこともあったと言えよう。萩の舎の中島歌子(1844-1903)、樋口一葉(1872-1896)も師事した重嶺に対し、歌壇・詩壇において、新派である秋香の新体詩は詩歌の伝統を革新せんとする、文学運動を起こしたと言えるだろう。これらの背景と血脈に連なる学統とが、春二の文藝的、思想的基盤を生成したのであった。

本稿では、創造的批評の史的変遷を中村秋香、春二父子に学びつつ、「伝統」の「型」「枠」、これを如何に柔軟に捉えつつ、時代状況によって即効性のある教授を志向することを考えて見た。今、このことが、現代の大学での日本語教育にも必要なものであり、我々に課せられた使命となっていると言えるのである。

註

- *1 東京高師附属中学校、第一高等学校、東京帝国大学文科大学国文科卒業。東京高師附属中学校長をつとめていた嘉納治五郎に招かれ、母校で教鞭をとる。1906年（明治39年）、今村繁三の支援を得て本郷西片町（現在の文京区）の自宅に学生塾「成蹊園」開設。三菱財閥総帥岩崎小弥太の支援で池袋に成蹊実務学校等、五校を開設。1919年（大正8年）、これらを統合して初等教育・高等普通教育・専門教育を目的とする財団法人成蹊学園を設立した。明星大学の前身、明星実務学校（1923）の創立者・児玉九十（1888-1989）が成蹊実務学校の事務局長であったことは記すまでもあるまい。
- *2 上原作和「学生の語彙使用例から見た「日本語力」とその教育方法」『明星大学明星教育センター紀要』第二号、2012年3月。
- *3 戦前、博文社刊行の『辞苑』の改訂作業を岩波書店が引き継ぎ、昭和30年（1955）初版、現在、第六版。最新第六版では24万語（2008年）を擁する国語辞書・事典。電子辞書にも組み込まれ、我が国で最も広汎に使用にされている辞書であると言える。成立の背景、批判の書も多数有る。柳瀬尚紀『広辞苑を読む』文春文庫、1999年、『プロジェクトX挑戦者たち10』日本放送出版協会、2002年など。
- *4 萩谷朴校注『日本古典全書 新訂土佐日記』朝日新聞社、初版1950年・新訂版1969年。
- *5 大岡信『日本詩人選 紀貫之』筑摩書房、1972年。
- *6 松村誠一「中村秋香・春二先生の新資料」『緑蔭堂文庫ニュース』成蹊大学図書館、1989年。
- *7 「青谿書屋」「桃園文庫」については、上原作和『光源氏物語傳來史』武蔵野書院2011年参照。
- *8 『桃園文庫目録 中巻』東海大学付属図書館、1986年の「釈文」による
- *9 上原作和「清少納言の末裔——「こまがさうし」の読者圏」小森潔、津島知明編『枕草子 創造と新生』翰林書房、2011年
- *10 解説「連想の文学」萩谷朴校注『新潮日本古典集成 枕草子』新潮社、1977年。
- *11 藤本宗利『感性のきらめき清少納言』新典社、2000年。
- *12 分銅惇作編『日本現代詩事典』おうふう、1986年。
- *13 鈴木亮編『秋香集 長歌』翻刻と解題』武蔵野書院、2012年。春二の著述引用も同書による。
- *14 深沢秋男「鈴木重嶺（翠園）伝記研究序説」『文学研究』92号、2004年4月、上原作和『光源氏物語傳來史』武蔵野書院、2011年参照。

付・国立国会図書館 近代デジタルライブラリー「中村秋香」資料一覧

- 活語図／中村秋香編輯 片野東四郎、1874〈YDM78246〉
- 小学女子書簡文梯. [1], [2], [3] /中村秋香編；小中村清矩 不二書屋, 明 15.10〈YDM80708〉
- 西国立志編. [1], [2], [3] /中村正直原訳；中村秋香和解 有終堂, 明 15.12〈YDM9755〉
- 書簡八面鋒／中村秋香著 不二書屋, 明 18.6〈YDM80144〉
- 新説歌がたり／中村秋香著 福田書店, 明 24.11〈YDM86138〉
- 祝日大祭唱歌／中村秋香作；奥好義選曲 福田書店, 青山堂, 明 24.11〈YDM73078〉
- 帝国紳士用文／中村秋香著 青海堂, 明 26.4〈YDM80369〉
- 祝日大祭日歌詞解釈／中村秋香編 共益商社, 明 26.10〈YDM73066〉
- 中古文鑑. [1], [2] /中村秋香編 青山堂, 明 27, 28〈YDM81882〉
- 日用文鑑参考書／小中村清矩；中村秋香編. 増訂 青山清吉, 明 27.2〈YDM79363〉
- 新編遊戯と唱歌／中村秋香著；白井規矩郎編. 訂2版 同文館, 明 30.8〈YDM75499〉

- 皇国文法積義／中邨秋香著 大日本図書, 1898 〈YDM78291〉
- 皇国文法／中村秋香著 大日本図書, 明 31.7 〈YDM78289〉
- 新編女子書簡文法式／中村秋香著 前川源七郎, 明 31.11 〈YDM80892〉
- 新体詩歌自在／中村秋香編 博文館, 明 31.11 〈YDM88011〉
- 中学音訓かなつかひ／中村秋香著 文栄堂, 明 31.12 〈YDM77259〉
- 吉野拾遺詳解／中邨秋香著 博文館, 1899 〈YDM89065〉
- 落窪物語講義. [1], [2], [3] ／中村秋香述 誠之堂, 明 34-35 (中等教育和漢文講義; 第29編) 〈YDM88961〉
- 兵庫県地理唱歌／中村秋香著 女学書院, 明 34.4 〈YDM73430〉
- 志太温泉誌／中村秋香著 大日本図書, 明 34.5 〈YDM24892〉
- 落窪物語大成. [1], [2], [3], [4] ／中村秋香著 大日本図書, 明 34.7 〈YDM88962〉
- 菅公の歌／中村秋香著; 小山作之助曲 弘文館, 明 34.8 〈YDM72887〉
- 唱歌菊水旗／中村秋香作歌, 梁塵土曲 弘文館, 明 34.8 〈YDM72889〉
- 中古文鑑. [1], [2] ／中村秋香編. 訂正7版 青山堂書店, 1901.10 〈YDM300459〉
- 菅公伝／中村秋香著 誠之堂, 明 35.1 〈YDM6921〉
- 修身教育十二ヶ月唱歌／中村秋香著; 鈴木米次郎等曲 三育舎, 明 35.5 〈YDM73053〉
- 女子消息文の手ほどき／中村秋香著; 小野鶯堂書 文栄閣, 明 36.2 〈YDM80754〉
- 新編手紙／中村秋香著; 小野鶯堂書 前川文栄閣, 明 36.9 〈YDM80294〉
- 古今集詳解. [1], [2], [3], [4] ／中村秋香述; 加藤きみ子記 前川文栄閣, 明 37-41 〈YDM85932〉
- 僧月照／中村秋香著; 白井規矩郎曲 修文館, 明 39.3 〈YDM72729〉
- 秋香集／武藤元信編; 中村秋香著 五車楼, 明 40.6 〈YDM85573〉
- 秋香歌かたり／中村秋香 (不尽廼舎) 著 五車楼, 明 40.6 〈YDM85572〉
- 不尽之屋遺稿／中村秋香著; 中村春二編 前川文栄閣, 明 44.1 〈YDM86520〉